

2013年5月23日

地域福祉を支える市民協同パネル世話人会メモ

■愛知高齢者生協理事長 長谷川勝彦さんの話



高齢者生協の理事長をしている長谷川と申します。今日は話をしてほしいということで資料を送られて一度読みましたが、なかなかいいことをやっておられると思っております。ここには「団塊の世代の仕事起こしと高齢者生協の役割」と書いてありますが、団塊の世代の仕事おこしというのは、全く手がついていないんです。

というのは、団塊の世代を正確に把握しているところはどこにもないんです。今我々は団塊の世代の人たちに会って、どういう考えを持っているのか簡単なアンケートを作っています。団塊の世代は、世の中の激しい競争に疲れ果ててしまって、再び事業なんかやらないと思っていたのが私たちだけでも、実際に聞いてみなければわからない。私も団塊の世代の人に意識的に会っているんですが、いわゆる建築設計だとか、きちっとした仕事をやっていた人達ですから。その延長で相談に乗ったり力を貸したり、そういうようなやり方をしている人が結構いるんですから、やはり生業とはしないというやり方ですね。それはもっと正確に調べたうえで対応したほうがいいのではないかと考えています。高齢者生協でできるかどうかはわかりませんが、日本労働者協同組合連合会が仕事おこしをやっておりますが、そこがどういふうに団塊の世代を把握するかということ提起したほうがいいのではないかと、私は思っております。

愛知高齢者生協の状況ですが、愛知の高齢者生協は小さいので知らない人が多いと思います。設立については、日本労働者協同組合連合会（日本労協連）が1993年に、来るべき高齢者社会をめざして、高

高齢者協同組合づくりを市民に呼びかけました。「寝たきりにならない、しない。元気な高齢者はもっと元気に。一人ぼっちの高齢者をなくそう。」をモットーに、高齢者自身が主人公として暮らしていく、地域社会を作っていく。「生きがい、福祉、仕事おこし」を三本柱に、高齢者の社会参加、高齢者の自立した生活、介護予防と地域福祉の充実などを、地域の様々な団体や自治体と連携しながら進める。こういうような理念で作りました。

今連合会に入っているのは21件の団体ですが、高齢者生協はもっと多いんです。連合会に入っていないところもあります。千葉は入っていない。京都は生活協同組合に認可されて、今度の総会ぐらいに入るといっています。愛知県の高齢者生協は、日本労協連に加盟していた愛知県高齢者就労事業団、企業組合あいち労働協同事業団が中心になって県民に訴えました。初めは生協となっていないくて、高齢者協同組合ということで出発しました。介護保険制度ができて、介護事業は法人でないとやれないので生協法人を1995年9月に作って、同時に県に申請したんだけど認められませんでした。

購買事業の実績を作ってから申請をと……。ここにはめいきん生協やみかわ市民生協があるし、そんなところへ新しく作ってどうするの?と県の担当者とやり合った。僕は、そんなことだったら意味がない、我々はそんなことをやるうとは思っていない。県の担当者に厚生労働省へ行って聞いて来いといったら、前の理事長が「長谷川クンやめとけ」と怒られた。厚生労働省にはそういう動きがあったんですよ。いわゆる福祉を中心にした生協を作ってもいいという動きが。これは3年ぐらい棚ざらしにしていたけれども、

県の役人が「ちょっと長谷川くん来い」といったので飛んで行ったら、「生協、認可するから書類をもう一回きちんとして持ってこい。」と言っんです。それで全部ちゃんとチェックして持って行きました。1カ月で生協をくれたんですね。なんで1年かかったのかというと、めいきん生協が共済の元請けを出して、それをずっと勉強していたので棚ざらしかったが、ここで作った。

愛知高齢者生協の事業と事業内容および事業高については、愛知環状線沿いに地域福祉事業所を作るということで。名古屋本部は福祉用具の貸与。守山区にヘルプサービス「あまこだ」があって、居宅支援と訪問介護と障がい者支援、6360万ぐらいをやっています。ここは今年の9月頃からサービス付き高齢者住宅を作って、来年の4月から事業を開始することになっています。私は小規模多機能がいいと言ったんです。小規模多機能のほうが利用者は介護保険の使い勝手がいいんですよ。その代り、一人の利用内容は決まってくる。まずは10人余のデイサービスをやりながら切り替えていくという作戦も考えるということも。ここは最近では若い常勤者が入ってきているんですね。そのサービス付き高齢者住宅事業を見越しながら、そういう方をどんどん入れて成長していくということです。

春日井は地域福祉事業所「ぬくもり」があります。これは勝川朝宮の公園の近くにあるんですが、居宅支援と訪問介護、障がい者支援、通所介護、8087万ぐらいです。もう一つは高蔵寺押沢台に在宅福祉サービス「かがやき」、通所だけをやっています。豊田には「保見ヶ丘ケアセンター」があって、訪問介護、障がい者支援、介護教室で2322万ぐらい。岡崎では、西三河地域福祉事業所「かけはし」、居宅

支援、訪問介護、通所支援、障がい者支援、4885万ぐらいです。

事業高はまだ2億3819万ぐらいですが、これは一つはこういう問題があった。我々が高齢者生協を立ち上げて、ヘルプ協会を作って事業の準備をしていた。それを高齢者生協に渡して準備をしていたら、隣で社会福祉法人を急に立ち上げてしまった。小規模にデイサービスの事業はやっていたが、それ以外に事業はなかったので、高齢者生協が作ってきた事業を全部持っていかれてしまった。労協がバックアップして、もう一度初めから作り直すということになりました。ヘルプサービス「あまこだ」も、春日井も、「かけはし」も全部2級ヘルパー講座をして、その中で事業を立ち上げた。最初からそういう形で、2級ヘルパー講座を終了した人を集めて立ち上げた。そういうやり方をしてきた。みんな思いが強くて一生懸命やりだした。自分たちが地域に密着した事業をおこす、これを労働者協同組合の形でやっています。

地域の課題解決に向けてということで、リーマンショック、トヨタの大量派遣切りによる失業者の増大に対して、地域の課題とどう取り組むか。特に保見ヶ丘では外国人労働者が多く首を切られていて、高齢者協同組合はどういうふうに取り組んだか。ここに保見ヶ丘地域福祉事業所の報告と、日本労働者協同組合連合会の新聞があります。5月15日の労協新聞を見ていただきたい。ここから2級ヘルパー講座の基金訓練（国の制度で、失業者を就職させる）を、保見ヶ丘で取り組んだ。最初は20名以上が来て、試験をやって採用したのが18人ぐらいだった。日本人が半分で、ブラジル、ペルー、中国人もいたし、そ

の他アジアの方たちがいて、半々ぐらいで隣に座ってもらい、ルビを振り通訳も付けてやった。こういうやりかたでやってきた。最初はワークスコープ作りと言っていたが、それは無理だった。NHKのクローズアップ現代でも取り上げられました。

地域福祉事業所作りが始まったということで、第一期修了生の3人が中心となって介護教室と同時並行で事業所づくりが始まった。保見団地周辺へビラを配布して、地域福祉を考える会を発足させて地域の人たちにも入っていただき、4回ぐらい開催しました。第三期介護教室よりラテンアメリカセンター内に教室と事務所を移転して、事業所の名称を保見ヶ丘ケアセンターに決定しました。看板も設置。地域包括支援センターや区長へのあいさつ回りなどもやりました。訪問介護事業所、在宅介護事業所の指定を取るためにサービス提供責任者の募集をしましたが、苦労しました。日系ペルー人、カルメンさんが応募してきました。受講生の子どもの自閉の相談を開始して、地域の人が次々に相談にきて、保見ヶ丘センターとして指定を受けるまでの間は、春日井の「ぬくもり」が面倒を見ておりました。

相談者の事例ですが、ここは外国人のかたは制度のことを全く知らなかった。こういう制度があるということを説明して、その人たちに制度を活用していただく、ずっと相談に乗りながら制度にはめ込んでいった。豊田市が非常に喜んだ。豊田市は通訳がないので非常に困っていた。ポルトガル語でしょ、働いている方は両方話せるので、そういう人たちは常勤者になってもらった。豊田市は感謝していました。事例を通して見えてきた課題は、外国人ヘルパーへのニーズ、日本人と外国人の共生だから対応できる事業

へ。

東日本大震災が起きて、4月17日から1週間、保見ヶ丘の事業所から岩手高齢者生協の大船渡事業所に派遣をした。やはり非常に全国的に注視されて、厚生労働省の外国人と失業者をどうするかということで、部署を作るために部長になる方が観にきました。何が課題になるかを聞いて行った。やはり基金訓練の役所のやりかたは、カネだけあればいいというやり方なんです。その人たちを職につかせていくというやり方を重視しないとまずいんじゃないかと言ったら、そういうことですかと聞いて帰ったですが、やはりそういう必要があると思っていました。我々のところでは、そういう資格を取っていただいて、働ける人は全部で11人、常勤者は3人で回しています。障がい者が多いですね。一時は8000人ぐらいいましたが帰られた方も結構多い。一時暴力団の抗争があったが今はない。ブラジルはオリンピックとサッカー。トヨタは現地に工場を作った。大分帰った人たちもいらっしゃいます。だけでも、大部帰ったが、日本は治安がいいということで、残っている人もいます。

和歌山の高齢者生協は、仕事づくりということで一番進んでいるんですよ。愛知も助け合い事業でやっていますが、ここまでやっていない。和歌山の元気シニアの生きがい活動は、仕事おこしと仲間づくりの二つの分野。どこでも同じようなことをやっているが、和歌山が仕事量が一番多い。我々東海と関西でブロック会議というのを、3か月に1回やって交流をしています。和歌山は一麦会、麦の郷の障がい者福祉

の田中さんが今理事長をやっています。そこが中心になり、高齢者も元気づくりが必要だし、障がい者も年をとっていくので組織づくりが必要だということで、社会福祉法人一麦会が高齢者生協を作った。障がい者施設の送り迎えもやっている。非常にいい関係になっている。店を作り農産物や加工品を売っていて、障がい者や高齢者が働いている。なかなかいい動きをしている。団塊の世代も入っているようです。和歌山は団塊の世代の仕事おこしについて、行政から提案書を出してくれということ、和歌山県の高齢者生協は提案書を出しているんです。それが採用されて、事業として塩づくりなどをしていたがぼしかった。継続ができなかったと言っていました。何が問題だったかは、もう一度きちっとやってみなければいけないと言っていました。でも提案書を作成して提出し、実際に事業をやっているの、提案書を見てみたいと思っています。もう7年くらい経っている。和歌山市、海南市、橋本市・・・それぞれが別れてやっている。女性たちが頑張っています。

愛知はたすけあいの事業をやっているが、ほつんぼつんの程度。岡田君とも言っているが、高齢者生協をなぜ作ったのか、原点に戻って。コアの事業がないとやっていけないが、一番重要なのは元気な高齢者づくりなんです。それには働くこと、役に立つことにこれから力を入れていく必要があるんじゃないかという事が、今言われているんです。必死で立ち上げてようやくちょっと落ち着いてきたところ。これから元気な高齢者づくりを結集させる。その中に団塊の世代は何を考えているのかをつかんで、どんなふうに



団塊の世代の人たちと接触して行くのかということ、一つの重点にしながら実働部隊を作っていくというのが今問われている状況です。そういう点で、ようやく中心課題に向けて事業が安定してきました。

しかし、介護事業は厳しい。3年に1回見直しがあってみんな抑制で、要支援1と2と要介護1と2は外して自治体のほうへ持っていくとしている。自治体によって差が出てくる。そういう点でメインの元気な高齢者づくりは、非常に重要になってくる。高齢者が何をやっているかというところ、ゲームセンターでゲームをやっている。今1円パチンコがあるんです。みんな暇で、そういうところへやることのないから行っている。それはもったいない話だし健康に良くない。団塊の世代も、労働組合の活動をやっていた彼は囲碁が強くて5人並べて置いて一人で碁を打つ。そういう人だったけれども、結局やることのないから、酒を飲んで体が悪くなって障がい者になってしまった。結構そういう人がある。設計をやっていた彼は、囲碁は好きでやっていたが、奥さんによれば朝から酒を飲んでいる。そういうふうになってしまう。

出てこられるようなたまり場を作ろうとしているんです。そこで自分の能力を発揮する。碁が好きな人は碁を打って人を組織する。麻雀が好きなのは麻雀で、新しい人を連れてくる。カラオケもやっているし、ヨガもやっている、お茶も。自分の得意分野で組織していく。やはりたまり場が必要。たまには食事をやって、楽しみながら仕事もやって。コープあいちゃんもやっているが、たすけあいというのがありませんか。こちらは利用者からきちっとお金をもらい、組合員は安くして。

ここにあるように、年金15万円、5万円というのは結構大変です。愛知県高齢者生協もいよいよ元氣

な高齢者づくりの仕事を中心にやらないと、高齢者生協を作った意味がないということなんです。

今度全国の総会を愛知でやるんです。介護保険事業だけではなく、事業としてはやらなくてはいいけないが、重視をしていく必要があるのではないかな。

総会でのあいさつは在宅福祉懇の代表が出られないので、副代表の向井さんをお願いしました。

事務局：長谷川さん、どうもありがとうございました。

この話を受けて感想やご意見がありましたらお願いします。

●豊田さん：先ほど高齢者のたまり場が必要だというお話でしたが、みんなそうかなと思います。特に僕らでいうと、ニートひきこもりの人の技術を引き出す場所を今作ろうとしています。今まで使っていた場所を、そういう形に改装していくという構想があります。長良の家の1階を喫茶店のように。長良地域は高齢者が多いんですね。地域の人が入って来られるような、若者と交流できるような場所と、仕事を作っていくという構想を話しています。特に元気な高齢者というのが、なんかいいな。

●長谷川さん：今度作る「あまこだ」のところも、地域交流の広場というのを作っただけです。地域の人が入って来て何でもできる。畑をやっている人はたくさんいるので、朝市もやるかと言っている。

●津坂さん：あらためて高齢者生協を作りましようということで、理念の中に「寝たきりにならない、しない、元気な高齢者はもっと元気に、一人ぼっちの高齢者をなくそう」ということを掲げてみえて、もう一度原点に戻ろうというお話、ありがとうございました。

●椋木：ラテンアメリカセンターというのはどんなところですか？

↓長谷川さん：名鉄資本が団地内にスーパーをやっていたんですが、撤退したんです。それを外国（スペイン）の人が経営するようになって、その中で野元先生が外国人の方々を助けたが、野元先生の自分流のやり方が行政とぶつかってしまい大変だった。日本語を教えたり学童保育のようなことをやっていた。今は神父さんのような人が中心になって運営している。子育て保育所のようなことをやっている。

●向井さん：事業団から高齢協を作り生協法人にして、直接的には介護事業を中心とした地域福祉事業所を開設。もともとある高齢者協同組合が目指す元気な高齢者で生きがい、仕事おこし、福祉を3本柱・・・目標にアプローチするときに、地域福祉事業所が事業や地域の生きがい場所の終結点みたいに見えてきたということですか？いわゆる仕事おこしだけでいうと、いろんな仕事からのアプローチがあるんじゃないですか。

●長谷川さん：だから今は介護だけ。もっと広いところを拠点にしながら、介護だけではなく高齢者が元

気にならないような事業をおこしていく、地域との関わりを持って。だから外へ出る。事業所内に閉じこもらないで、市民の中に入っていけというやり方なんです。でも今までは余裕がないので、事業を立ち上げて運営するだけで必死だった。少し外に出ないとそれではまずい。新しく作る施設では必ず地域の人に入ってもらって、交流できる場を作っていくということです。岡崎はすごく小さかったです。それではいけないので、大きな軒家を借りたんです。ここだと地域の人たちの交流ができる。もっと地域と結び付けるようにしようということです。

●向井さん：高齢者といっても、とりあえず団塊の世代では仕事を経た人もいれば、仕事を探しながら参加した方もいる。中心になっているみなさんの層は？他の高齢者組織との関係や接点、独自性はどんなっていますか？

↓長谷川さん：みんなダブっています。医療生協も入っているしコープあいちにも入っているし・・・。

●向井さん：ということはいろいろ入っているけれども、いろんな経験を生かしながら高齢協の地域福祉事業所の中で活かせる、そういう場にもなりそうなんですか？

↓長谷川さん：介護事業に携わっていない人たちが動き出すとそういうようになるんですが、介護事業だけだと仕事で目いっぱいになってしまってダメなんですね。だから地域の組合員も参加して、そこで助け合いの活動や仕事をしていかないと。介護事業をやっている人たちにやれとは言っていないよと。やるのは組合員です。

●向井さん：組合員がやるのは商品利用ではないんですね。就労とか、働くことですね。

↓長谷川さん：そういうのも嫌だという人は、囲碁や麻雀をやって遊んでいるし、小遣いを稼ぎたいという人は働く。

●向井さん：地域福祉事業所は、実際運営ですよ。もっぱら介護事業を中心にして集まってくる組合員が、その広がりで実現するような、地域活動を運営していくような仕組みとか・・・。

↓長谷川さん：全体の地域の運営というのは、まだきちっと決まっていないんです。事業のほうは運営委員会があるんです。事業のほうは女性が多い、こちらの方は年寄りの男性が多い。

●椋木：実際の男女の比率は？

↓長谷川さん：男女の比率は、女性の方がちょっと多いです。

守山でいえば、介護保険を利用している層はどういう層かというと、生活保護を受けている人や低所得者です。今度のサービス付き高齢者住宅も家賃35000円に設定しているんです。（みんなの声：えーっそんなことできるんですか？！）サービス付高齢者住宅で儲けることは考えない。みんな高いでしょう。あれは誰が入る？入る人はいないでしょう。そんなのは意味がないと言ったんです。みんなで議論をして、だったら使い勝手の良い、その地域に合ったレベルに値段を下げて。「あまこだ」で働いている人たちはみんな他人事のように考えていた。

「あまこだ」では、「あれは理事長と専務とYさんが作るんですよ。」というから「あなたが運営する

んでしょ」と。カネを集めるのは本部だし、みんなからも集めるし、組合員さんも集めるんですよ、500万くらいは。1パーセントくらいは出すんですよ。これは集まるんです。参加という意味では出資金が基本なんです、うちは1000円、組合員さんも集めて参加をして作る。組合員が参加して作るという意識を持たそうと。

●向井さん：資金出せる人と実際利用する人は地域によっては低所得の人が多いから、利用者層と関わる人はまだ広がりがあるわけですね。

●長谷川さん：早く入りたい人がいるんです。そんな安いところはないから。みんな7、8万ぐらい。国土交通省から1部屋100万の補助金が出るんです。それは周りの家賃がどうなっているのか調査しろということになっているんです。本当は小規模多機能のほかが利用者は介護保険の使い勝手が良くていいんです。あまり利用者の家族があれもこれもやってくれといわれると困りますが、一月いくらかは決まっているんです。いわゆるティサービスの形でもできるし、泊まりもできるから。お泊りティとは違います。

生協は補助金から外されている。福祉法人と医療生協、NPOはいいんです、名古屋市の場合ですが。なぜ生協は？生協だって介護の場合は出してもいいんじゃないか。生協はうちうちだろうというんですね。だと新潟のささえあいコミュニティ生協は新潟県がやってくれと言われた。誰もやらないで逃げてしまった時に、1号からやりだした。民家を改造して大変だったけど、それをやりきって広い方へ移った。2号3号4号、全部3800万ぐらいくれるんです。助成金で建物はできてしまう。あそこがいいところは

地域の人がいってきた。

地域の人が資金を集め人も集めて作る。その方が自分たちのものになるよと言ったら、やはりそう、わかった！といってやってくれるところもある。それが一番いい。市民が参加して自分たちの地域で作る。佐渡にも二つ作った、見てこようかなと思っています。

● 椋木：研究センターは東海のくくりでいうと、三重にも愛知にも高齢者生協はありますが、なぜ岐阜にはないのでしょいか？

↓長谷川さん：愛知が作れと言われていたがとてもそういう余裕がない。岐阜は作るんだったら、コープぎふと、事業主体はこっちがやるので、組んでやるというのだったらということで、連合会で検討するかなと言っているんです。だからコープぎふの川崎理事長と、こういうのを作るけれども、こっちの高齢者生協の福祉事業を使って、そういうことできちんとあれば、それはそれで動きだすということもできる可能性もある。

● 椋木：岐阜に住んでいる人間としては、団塊の世代の人たちや自分も含めて、地域の中で元気に暮らしていくために生協の運動があったら心強いと思っています。

● 仲田さん：コープぎふの退職者を組織すればできてしまうのでは？

● 長谷川さん：高蔵寺ニュータウンでは、学生と組んで地域の人といっしょに中部大学の先生が研究をしています。高蔵寺、多摩、千里、みんな一緒なんです。みんな高齢化して困っている。高蔵寺はコープ

あいちの店もあるし、切り口は買い物。元気な高齢者は畑を作ってやっているね。テレビに出ていましたね。みんなそれぞれが独立した動きになってしまっていて、つなぐといいことができるという可能性があると思うんですね。そこは研究センターがつかねばいい。

●飯村さん：夫が団塊の世代です。最初の頃は家にいてやることがないような感じだった。今は医療福祉生協と一緒に関わらせてもらい、運営員もやって、少しずつ自分のやりがいを見つけつつある時かな。ずっと会社人間で単身赴任だったので、地域にいきなり帰ってきてても周りに知り合いがない。前の職場の人から電話はあるけど、近所の方の付き合いが大事ということ。自分も仕事していた時は近所さんとはあいさつだけの関わりだった。家にいるようになって、仕事している時には見えなかった地域のことが。たまり場は大切で、医療福祉生協でもたまり場でお食事をした。毎月やってほしいという声があります。が、手作りだけでやるのではなく、外からとつてもいいじゃないという話もさせてもらった。作る側と食べる側が別れてしまっていたので、お弁当をとつたら一緒にになって食べながらしゃべれるということで、そんな形に変えていったらどうかという話をした。夜も男性向きに居酒屋的なことも始めてきている。高齢化していく中で元気でいきたいので、家の中で閉じこもっていないで、だけど家の中でしかいられない方もいる。そういう人をどうやって引き込むことができるのかな。やはり近場で、しゃべれる場所がほしいなというのがある。先日も、グループホームに入るのではなくて気心が知れた友達で、家一軒の中でいっ



しよに住んだら光熱費も一軒分で済む。これからは施設でというよりは自宅でというのが増えてくるので、地域にもっと目を広げて活動をしています。

●事務局：これで前半の話を終りにします。長谷川さん、ありがとうございました。

では社会的引きこもりの若者支援の活動をしていらっしゃる仕事工房ポポロの豊田さんから、このたび立ちあがったNPO法人リサイクルロンドについて少し話をさせていただきます。

●豊田さん：もともと水野さんがリサイクルロンドで関わっていた。紙のリサイクルということで、生協の職員の名刺や封筒を作っていた。以前は福祉作業所の仕事づくりでやっていたんですが、ずっとやっていく中で、詳しくはわかりませんが福祉団体が自立支援法の関係で、その関わりを失っていった。その中で、関わっていた平田さん一人が動いて個人的な形になってしまった。ポポロを作った頃に彼は現れたんですが、名刺の印刷ができない時期に来ていて、ちょうど仕事づくりが発足していたのでやってもいいよということになった。それがきっかけなんです。今、あらためて作っていいことこの中心になっているのは、仕事工房ポポロのようなニート、引きこもりの支援団体。あと福祉団体もいくつか残っていて、あらためてきちんとしていいことということで、何回か議論をして2年がかかった。そういう経過がありました。

特に生協の関係でいうと、紙パック、牛乳パックが出ますので。もう一つ、アルミがついたパックも集めよう、生協は一緒に集めようということです。今は店舗からしかもらっていませんが、支所へ集まってくるのも全部リサイクル Rond へ集めて、それをきちんとした紙のリサイクルにして、トイレットペーパーに変わったり、剥離作業ができれば名刺にも変わるよということで、生協の紙パックはうちが全部やる。岐阜県内全部をやっているという準備をしています。法人化したら急に生協も動き出した。これまでは任意団体だったから動かなかったんですが、急に動き出したんでこちらが間に合っていない状況です。



●事務局：ありがとうございます。また経過についてお知らせいただきたいと思います。

ではパネルの2013年度の進め方について。

●仲田さん：協同組合がやっている社会福祉事業は高齢者が主ですね。障がい分野や児童の領域は？

↓向井さん：全国の協同組合の保育分野についてはちょっとわからないですね。

仲田さん：高齢者は量的にも拡大してきている。一方児童の領域で保育の方は、今後機問題が深刻な状況があります。これは福祉パネルで、高齢者福祉パネルじゃないですね。

もう一つの問題意識は、2015年に団塊の世代が基本的にはほとんどがリタイアする。社会的に支えられる側に、年金受給者1000万人近い人がそちらにシフトするんですね。ほくろもそうなる。

10年後というと75歳、後期高齢者で、年間160万人くらいが死ぬわけですね。多死社会になる。そのうち40万人くらいは病院や施設で死ねない。そういうことがわかってるので今からどうにかしないといけないんですけど政治的に、どんどん高齢者が増えていく。有権者でしょ。本当はもっと支援しないといけないわけで、高齢者問題はそういうことも考えなければいけない。

いつも両方の視点で考えていくことがとても大事です。そういう理屈っぽいことをメンバーの中で議論したり、勉強したりしたいですね。

●事務局：子どもに関することで、被災者支援のほうは向井さんが関わっていらっしゃいますが、向き合っている向井さんから何か・・・。

●向井さん：仲田さんの言われた事の延長線でいうと、今の政府が国の責任で、災害被災者を個人の財産の領域まで再建を考えるかどうか。生活のセイフティネットをぶつぶつ切って、憲法の基本的人権の条項を全部なくしてという発想の政権ですね。たぶん相当厳しくなるでしょう。阪神大震災の時にできてその後拡充された、住宅再建で保障する一山山さんが知事の時に一歩突っ込んでやって、当時の官僚を説得して、個人補償を増強したんだけど……。東海、東南海地震の規模を考えると財政が大変だから、被災者再建法は規模を後退させようとする動きがあるんです。

だから僕らが考えようとしている地域福祉というのも、ちょっと前でいうと、リーマンショックと小泉政権の下で毎年上限を見直したということがあり、それは大変だという事で、介護保険、くらし助け合いの会の活動に加えて、地域のネットワークづくりを始めた。当時のめいさん生協でいうと、安心して暮らせるネットワークづくりは、そういう問題意識で、そういうことを跳ね返そうという事でやってきた。実践や研究センターでの活動も、それなりに少しずつ進んできた。その後民主党政権に代わって少し期待をしたけれども、2～3年経つとこういう政治状況でしょ。一挙に大事なものを全部なくすことが当たり前のような政党でしょう。基本的には政治が変質していますよね。歴史認識が全くでたらめな人が首相で、経済政策の人氣の上に、なおかつ憲法改正をしようとしていますね。

地域福祉を支えるという、そもそも日本の国の動向がどうなっていくのか、もう一度今の状況を正確に把握することをやらなければいけないです。朝倉先生がコープあいちの理事会で強調されていたところな

んで。それを見誤るといけない、従来の関係でやれるわけではないですから。

それが日常の関係で、コープあいちの支え合いモデル事業でも協同組合の間に入って、社協や地域のさまざまなボランティア組織や行政、包括支援センター、医療生協、農協などで、それを支える関係づくりをやろうと声をかけました。都市部でも中山間地域でも、そのことについての期待は高く、継続して2年目に入ろうとしている。そこで登場する人たちが地域福祉の担い手としてどうかということでは、高齢協がやろうとしているような地域福祉事業所の実践もあります。

愛知在宅福祉事業者懇談会は、地域生協法人、医療生協法人、高齢者生協法人、社会福祉法人、株式会社、NPO法人といういろんな法人形態の人が集まって、足かけ6～7年やっているんです。ただ、必ずしも地域の中のつながりはできていないんです。今日はデイサービス部会をやったり、お泊りデイについての実態調査をやったりしています。災害時の行政の連絡は、障がい児童分野では来るけども高齢分野では来なくなったり、民間自立型で展開しているから災害時に来ないです。同じ法人がやっても児童分野はすぐ帰しなさいというのが来るけれども、高齢分野は来ないというような問題をどうするかというような積み上げをやっていきます。地域福祉を支える市民協同で言うと、本当にそういうつながりを実践的に作っていくのかどうなのか、という積み上げをやっていかないと、ただ手をつなぐという会議体を作るだけでは前進していきかないので。そういうことはやりながら、テーマとしてあると思います。

今質問があった、子ども被災者支援法というのは、家や仕事や子どもの健康の問題を優先して避難して

いる人たちが3年目に入って、本当にその人たちの生活を支えるような関係があるのかという、法律、支援制度からのアプローチと、高齢者、男性独居、外国人、一番の中心である小学生以下の子どもさんを抱えたお母さんの世代、そういう世帯の生活を支えうるような環境が出来ないまま、本人たちは大変な心身のストレスに追い込まれている。それもどうやって地域で支えるか。コミュニティで支えるというものと、法的に支えるものと、司法の場で損害賠償で。日常、コミュニティ、行政、司法、それぞれごとにやっていかなければいけないですが。

地域社会や我々に求められている課題は、ひとりひとりの声をじっくり聞けばわかるし、何とかしなければいけないという気持ちの人たちもふえるですが、どうやって市民の力で法制度に切り替えていくか、あるいは自治体レベルの政策にしていくなか、もしそれが無い場合は現実問題としてどうやって支えるか。セイフティネットをなくして自己責任の世界に変えようという人たちの力が、一時的に強くなってしまう瞬間に、我々は政治的な対抗や社会的な対抗もあるけれど、自分たちの生活をどうやって協同していくかというのと同じようなパラレルの関係が見えてくるんですね。そういう点では共通する問題がある。災害時みたいなことで焦点をあてることは意義があると思います。

● 椋木：益々住みにくくなっていく時代に、市民の協同によって政府を少しでも変えるような力を発揮できないでしょうか。協同組合での実践経験がある人たちが過去にやってきたそういう力を、これからの人につないでいけないでしょうか。そのとき課題をできるだけ絞る、はっきりとさせたほうがいいとは思

ますが。

●向井さん：あり方研究会も、一つはそういう変化の下で、従来生協を支えてきた高度経済成長期の条件はすべて変わってしまったからどうするんですか、というのが基調の問題なんですね。向井先生はその辺を経済学などの角度から問題提起されているし、小木曾先生はそういう角度から地域の変化について、朝倉先生は一步突っ込んで、コープあいちの実践をなぞりながら福祉型協同組合という考え方を提示されている。向井先生は食糧農業分野です。消費者問題でいうと、近藤先生は消費者組織としての生協をみた場合の社会的な課題と現状があるかについて問題を出されている。研究者のみなさんはこのぐらいで時代認識は共通している。朝倉先生は出口として福祉型協同組合ということなのかどうかがあるとしても、そういうスケールの問題提起ではある。

地域福祉ということに引きつけながら時代認識だとか社会環境だとか、協同組合が協働する場合、組合員は実際の生活で何を求めているかということを考える。そういう一つ一つの思考プロセスをパネルで追いかけるのは、非常に大事ではないかと思います。それに対して実践家の兼子さんや仲田さん、山下さん河原さん磯村さん、私も、どうするかということの後半書いていて、それも研究会に出た実践メンバーとしてちゃんと出しましょうということですよ。

●津坂さん：本当に困ってくるといふのは、はっきりしているんですよ。それは実際に今住んでいる地域のその場所で困るということもはっきりしている。じゃあそういうことになることがわかってるんだ

ったら、今から何を準備できるか。そういう緊急事態に陥ることがはっきりしているから、想定されることや準備できることは何かということとを、課題として載せないとソフトランディングできない。スウェーデンみたいにゆっくり入っていかればいいけど、日本の場合はもともと想定されていないから、世界から注目されているんですよ。日本は一体どうするんだ。日本の事例を見て各国はどうするかということなんです。こんな急速なことはないんですから。いわば世界最先端です。

●向井さん：岩手からの大槌市で活動をしている先生の話では、日本社会の最先端の課題です。少子化高齢化、人口減少、災害・・・厳しいけれどそういうつもりでやっていますと言っただけども。問題がそこにあるとしたら、そのことに関われるということは意味があるんだから、どのぐらいの深さでやるかということだね。

憲法問題のように国のあり方が変わってしまうことについて、ルールを変えることは反対だけど中身についていいってもいいというような人がいる。当たり前というような感覚すら共有できない時代の中で、思想的文化的なアプローチも必要じゃないですか。研究センターの立場でいうと、ひとつの連係した目に見える多くの人たちにとって、協同組合頑張ったじゃないかといわれるようなものを作るような、励みになるようなものは作りたい。ＪＡ中央会、農協さんもそういう問題意識をもっているから進んでいける。大学生協も医療生協も高齢者生協も、そういう人たちが集まっているから。そういう全体像の中で福祉、地域福祉、市民とか、その領域でどのぐらいの深さで、どつという問題意識で、どう関わって何を発信するか、



ですね。

●津坂さん：ちょっと角度が変わりますが、NHKの明治時代の建築という番組を見ているんですが、小学校は一番最初、地域の人たちがカネを出し合って作ったんですね。カネを持っている人はたくさん、カネが少ない人は少い。こんなようなことしていた。世の中の変わり目ということから、明治維新という時代の中で、その次を準備しようという意識があったから小学校にカネを出そうとか、自分たちの地域の中で人材を育成しなければいけないとか、立身出世みたいなことになるわけですが。先ほどの子育ての話でも、今子どもの人がずっと子どものわけはなくて、世の中をしょって立つ人材になっていく。少なくとも今の社会が継続していく限りは、全部つながって構成していくわけだから、瞬間を切り取るみたいな考え方は間違いがっちゃうし。僕も中学1年生の子どもがいますが、貧困世帯に該当しかねない自分の立場から言っても、教育や地域の中での社会そのものや地域環境を含めて考えると大変……。豊田さんの引きこもりの話もそうですけれども、そういう視野の中で次の時代を準備するうえで何が必要なのか。本当はもう遅いのかもしれません。

●事務局：どういうことに問題関心を持ちながら進めていくかということですが、何か。

●仲田さん：ここに関わるメンバーを増やしていくことに関わるんですが、今南医療生協の仕事ではなくて組合員活動レベルでやっていて、いろんな私的な問題意識を実践されている方に会う機会が増えています。例えばそういう方をこのパネルにお誘いしてはどうか。当然人数の上限が出てくるでしょう。その

辺を課題にして、どんなイメージでパネルのメンバーを構成してやっていくのかということで次回話し合いができるのであれば……。もちろんそういう人はセンターの会員になってもらっていただければ一番いいかな。

●事務局：パネル世話人会の参加は10～15人。世話会会は生協の会館の部屋を借りてやれる規模でやれていて、やりやすさがある。それとみなさんの落着いたコミュニケーションという点ではうまくいっていると思います。地域で共に活動している人などで、世話会会にお誘いして話してもらうということはいいいのではないのでしょうか。事前に事務局に知らせておいていただきたいですが、30人規模の世話会になると雰囲気はかなり変わってきますが、現実的にはそうはならないような気がしています。

●津坂さん：連れてきたい人はいます。

●向井さん：増えることはいいことですが、そのときにパネルの軸はどのようになるのかということが大事です。

●事務局：事務局としてはここで話された中身は発信していきます。

ゲストで参加される方は、話題提供ということで話していただければよいのではないのでしょうか。事前にどんな内容の話になるのか打ち合わせしたりもします。

●向井さん：研究センターの発行物の中身をまとめていこうとしている時だから、パネルも2～3か月に一度は報告が掲載できるようにするということもあるが、こんな話し合いをしましたという紹介ではない。今日の長谷川さんの話でいうと、多くの人たちが自分たちの役に立つように消化し直さなきゃいけ

ないです。それが広い意味での研究プロセスというか、実証したりするプロセスです。仮に、高齢者生活協同組合と一緒に東海の地域づくりをしようというようなテーマがあって、愛知ではどう？岐阜ではどう？三重ではどうか？みたいな問題提起があるとしたら、それを見てこれからの高齢者と一緒に、地域づくりを地域福祉事業所を軸にして関わることでできるんなら、それは大きいですね。居場所づくりで引きこもりのみなさんたちの居場所づくりをしている事と共通する話だから。実は地域福祉というのはこれらの地域における居場所として共通の概念に関わる・・・じゃもつと消費の生協、医療の生協、若者の生協がやっているものが共通の場所づくりをしようかと・・・そんなふうに問題が発展していくじゃないですか。そういう議論もちゃんとやりながら、なおかつまとめる。まとめるための素材まで掘り進める作業も伴ってくるんだと思うんですよ。

●事務局：研究センターからの発行物、研究センターNEWSのほうもリニューアルして、各パネルからの情報も届きやすくなると思います。まだ今、進行中のことなので詳細は分かりませんが、一応パネルとしては、ニュースレターとミニ冊子という形で発信できるよう、事務局は対応しています。で、今日の世話人会についてもそのように準備します。

世話人の方それぞれの言葉で、文字にしていきたいと思います。主体的な参加をお願いしたいです。本について学び考える、交流し合う。現実どうなっているかを見ながら往復することも必要ではないかと思っています。コープあいちの福祉政策も引き続き注視していきたいですが。

● 仲田さん：友愛・協同研究会の年報に掲載された橋本さんの論文に注目しています。高齢者生協のパネルディスカッション、年金15万円、全部重なってくるんですね。団塊の世代の社会参加、生きがいづくり、そして社会貢献。全部重なって理想的な実践、ケースをわかりやすく理論的に提起しているので、橋本さんに来ていただいて報告を受けて新たな視点での地域での仕事おこしを考えられるんじゃないか。地域生協、医療生協だけでなく、NPOも含めてね。そんなのもここで始めたらいい。

● 向井さん：やはりアウトプットを出すようなことを今年は目標にしたらどうでしょう。去年はニュースレターで文章化して話し合いをまとめる小冊子にしましたが、やはりみんなに還元できるようなものにまとめるというのが。やっているからには成果をほかの人たちに還元しないといけないと思うので、研究センターの性格からして。それは共通の目的にしたらどうか。僕のイメージは、半年に何人かのチームができて、この時期の話は私たちがまとめるみたいな。分担して、自発的に。そういうやり方でやるのもいいかな、素材はたくさんありますから。時代認識はそういうふうだし、そういうことが議論できるパネル全体の積み上げになっているというのも間違いない。しっかりと方向を据えて進めばいいと思います。

● 津坂さん：表現しないと、みんなここにいる人たちしか知らないということになります。

先ほどの時代認識だとか、これからほんとに困ることになるだろうよというようなことは、どこの誰を捕まえてもたいてい共通認識だと思います。そうだとということになると、大きな流れを誘発するようなも

のなる可能性もありますから。そういう意味でも何か出すということ。

●事務局：現実問題として、向井さんが提案されたことをやりますか？

●向井さん：それぞれからA4が1枚、A5が1枚くらいでどんなことやっていてどういう問題意識があるかを出してもらおう。それを編集しなおして、生協関係者も実践家もあれば、自分の生活のテーマを大事にしている人もある。豊かなアプローチが可能です。一つに絞るというのはもったいないくらい。たとえば、このパネルの基調文書を作る（私たちのパネルはこういう認識で、参加者はこういう分野で集まっています。今何をやっている・・・）松浦さんは小牧というフィールドがある。

●仲田さん：松浦さんとは別の視点で提携したいね。僕らの地域も商店街がさびれてお店がしまってきている。3年前から商店の振興会のメンバーと一緒に、まちおこしの取り組みを始めているんですね。でも衰退の勢いが止まらないんですが、一方では毎月ライブと寄席を交互にセットにしながら、みんなが交流できる場所づくりを始めていて、交流できるということかな。

●松浦さん：今日の話を聞いていて、自治会の活動でも団塊の世代を取り込もうとしているけど、自治会の活動で儲けることはできないなと思って。今までやってきた得意分野を、披露していただく場になるのかと。披露できる場を作っていく形になっていくかな。年金15万円、その5万円は自治会活動ではできないので。自治会から離れないとそういう仕事を持つことはできない。自治会を離れることができるだろうか。それができるか、やっていきたいとは思っているけれど。



参加者

長谷川さん：愛知高齢者生協理事長

飯村さん：コープみえ組合員

津坂さん：ワーカーズコープセンター事業団組合員

豊田さん：仕事工房ボボ副理事長

仲田さん：研究センター常任理事

松浦さん：コープあいち組合員

向井さん：コープあいち参与。研究センター常任理事

椋木：研究センター事務局

2013 年 9 月 6 日発行

NO.4

---

2013 年 5 月 23 日

地域福祉を支える市民協同パネル・世話人会

「愛知高齢者生協理事長 長谷川勝彦さんの話」

---

発行:地域福祉を支える市民協同パネル

〒464-0824名古屋千種区稲舟通り1-39 地域と協同の研究センター

TEL:052-781-8280

FAX:052-781-8315